ポストコロナ社会の有識者会議シンポジウム

多様性育む地域社会へ

兵庫県立大の五百旗頭真理事長が座長を務めた有識者による「ポストコロナ社会兵庫会議」が7月、ポストコロナを見据えた社会のあるべき姿について提言をまとめた。これを受け、さらに議論を深めるため、郷土振興調査会（兵庫県、神戸市、神戸商工会議所、神戸新聞社で構成）が主催し、五百旗頭氏をコーディネーターに、3人の専門家と新たに起業家を交え、シンポジウムをこのほどオンラインで開催した。

オンラインで行われたパネルディスカッション

五百旗頭氏　人間の安全保障が急務

五百旗頭　新型コロナウイルス感染拡大の第1波、第2波ともに抑え込むことができたが、その正体についてまだつかみ切れていない。

「ポストコロナ社会兵庫会議」が7月に発表した提言のポイントは二つ。オンラインでのやりとりを余儀なくされる状況を生かし、積極的にITを活用して競争力のある経済社会に変えていくこと。そして東京一極集中の流れを是正するために地方自らが心豊かなコミュニティーを育て、魅力のある地域を築いていくことだ。

今日は、ポストコロナ社会のあるべき姿について4人の皆さんと専門的な見地からさらに議論を深めていきたい。まずは皆さんからコロナ禍で感じていること、課題を。

南　自粛には、自ら進んで行動や態度を慎む、という意味がある。ドイツのメルケル首相は「今は人と距離を置くことが思いやりだが、根底では人は触れ合いが必要だ」と述べている。人は触れ合いの中で、生きていてもよいという実感を得ることができ、それが自分は自分であってよいのだという思いにつながっていく。

コロナ禍による恐怖、不安から、人は人より近くにいたいのにそれが制限され、大切な人に大切だというメッセージが伝えられずにいる。一人でこもる人が増える中でどのように触れ合いの実感を獲得していくかが課題だ。

オンラインでパネリストらに話しかける五百旗頭真氏

コーディネーター
五百旗頭真氏（兵庫県立大理事長）

パネリスト
南　裕子氏（神戸市看護大学長）
荒川　創一氏（神戸大大学院医学研究科客員教授）
平田オリザ氏（劇作家・演出家）
大津　愛氏（株式会社Compass代表取締役社長）

ポストコロナ社会兵庫会議

兵庫県立大の五百旗頭理事長の呼びかけで、県商工会議所連合会の家次恒会頭、建築家の安藤忠雄氏、ロボット工学の金出武雄・米カーネギーメロン大教授、劇作家の平田オリザ氏ら県ゆかりの12人の有識者により発足した。提言では、感染症、災害対策など政府の危機管理を一元化する「危機管理省（緊急事態省）」創設を提案。また、世界的な感染症流行に堪えうる医療体制の構築や行政、経済活動などのデジタル化の加速、一極集中を解消する分散型社会への転換などを求めた。

ポストコロナ社会兵庫会議の提言

提言1　パンデミック時代の危機管理
提言2　デジタル革新の加速
提言3　産業の競争力・リスク耐性の強化
提言4　分散型社会への転換
提言5　社会の絆の再生

（提言の詳細は兵庫県のホームページで公開）

ポストコロナ社会兵庫会議構成員（敬称略）

荒川創一（神戸大大学院医学研究科客員教授）▽安藤忠雄（建築家）▽家次恒（兵庫県商工会議所連合会会頭・シスメックス代表取締役会長兼社長CEO）▽五百旗頭真（座長・兵庫県立大理事長・ひょうご震災記念21世紀研究機構理事長）▽加治佐哲也（兵庫教育大学長）▽金出武雄（カーネギーメロン大教授・京都大高等研究院招聘特別教授）▽砂原庸介（神戸大大学院法学研究科教授）▽高士薫（神戸新聞社代表取締役会長）▽畑豊（兵庫県立大大学院シミュレーション学研究科教授）▽平田オリザ（劇作家・演出家）▽南裕子（神戸市看護大学長）▽室崎益輝（兵庫県立大大学院減災復興政策研究科長・教授）

南氏　触れ合いの実感が重要

荒川　コロナ禍は感染制御の大切さを医療現場、社会に改めて呼び覚ました。感染予防のためには今後もお互いが適切な距離を取り、マスクをつけ、3密を避けることが大切だ。

今後予測される第3波では、インフルエンザと新型コロナウイルスが同時に流行するおそれがある。インフルエンザの予防接種は早めに11月前半までに済ませておくことを勧める。また、新型コロナウイルス患者を受け入れている病院ほど医業収入の落ち込みがひどいことから、財政的支援が不可欠だ。

平田　演劇界は徐々に復興しつつある。ただ、これまで定員の5割までしかお客さんを入れることができないために採算が取れなかった。すでにチケット代の値上げが始まっており、富裕層しか舞台芸術に触れられなくなる現状を危惧している。

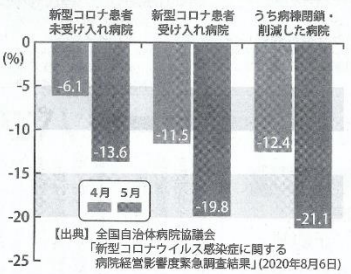
ステイホームの「ホーム」が本来意味するところは、帰るべき場所、すなわち一人一人大事にしているものだ。それは舞台や音楽、スポーツに触れることだったりする。そうしたホームを持たない人たちがコロナ禍によって孤立しやすい状況が生まれている。日本人は弱い人に同情するシンパシーは強いが、異なる文化や価値観に共感するエンパシーが弱い。エンパシーやホームを日本、世界でどう育てていけるかがこれからの課題だ。

大津　通信アプリ「LINE（ライン）」を使って無料のキャリアカウンセリングができるプラットホームを構築し、2018年春にサービスを立ち上げた。起業する前までは国家資格キャリアコンサルタントとして主にひきこもりとニートを中心に低所得者の就労支援を行っていた。低所得者層は人材サービスの網から漏れており、気軽に相談できる場が必要だと考え、起業した。

コロナ禍でサービスを使って出している仕事を日本に戻り、雇用の場を増やすことが大事だ。特に労働集約型産業に携わる人たちの現状は厳しい。海外に安い労働力を求めた相談者が右肩上がりに増えている。

荒川氏　コロナ3波の備え必須

■ 医業収入の状況（前年比・13の特定警戒都道府県）



【出典】全国自治体病院協議会「新型コロナウイルス感染症に関する病院経営影響度緊急調査結果」(2020年8月6日)

平田氏　共感の念養い孤立防げ

五百旗頭　荒川さんは専門家として兵庫県のコロナ対応をどう評価しているか。

荒川　県は、コロナ感染者の行動を綿密に調査し、接触者を90%割り出して、感染の広がりを防いでいる。初期にクラスターが発生したが、その後はこの手法でシャットアウトできている。軽症の感染者については自宅ではなく借り上げたホテル、旅館で過ごしてもらうほか、病態に合った病院に入院してもらうやり方で、感染を防ぎ、適切な治療につなげている。日本のモデルになるような取り組みだ。

五百旗頭　コロナは厳しい現実を突き付けているか。求職者は増えているのか。

大津　サービスの利用者は自治体の窓口に足を運んだり、専門家の知識を借りながら自分で問題を解決することが難しい。現実は深刻だ。

大津氏　低所得者の就労支援を

五百旗頭　豊岡に移住されてどう感じているか。

平田　豊岡は市中感染の可能性が低く、私も俳優ものびのびと作品づくりに集中できる。最寄り駅は徒歩4分、高速道路のインターチェンジは車で5分、空港へは10分で行ける。何の不便も感じない。

今後は、地方で暮らし、月に2、3回都心に出る働き方も出てくるだろうその際には、子育てがしやすく、教育プログラムが充実し、文化に触れられる街が選ばれる。豊岡をそのモデルにしたい。

今月9日から27日まで行われた「豊岡演劇祭」。豊岡市内約30会場で演劇、ダンス、大道芸などが演じられた

© iyaii photo studio

五百旗頭　日本人の精神性の行く先についてどう考えるか。

南　日本人は、お互いが空気のようにわかりあえるウエットな甘えの文化を持っている。そして、災害で困っている人があればすぐに支援に行く共感の文化を持っている。しかし、若い世代ではその甘えの文化が変化している。正しく恐れることを意識化し、コロナ禍で孤独に陥った人をサポートしていかないと感じる。

五百旗頭　コロナは米中の国家対立を加速したが、実は一人一人の生存への脅威であり、人間の安全保障が問われている。文化の多様性への感受性豊かなポストコロナのコミュニティーを求めたい。わゆるコロナ禍で伸びているような業種は雇用のハードルが高く受け皿も小さい。こうした人たちに生活安定までの道しるべを示し、意欲があればいつでもチャンスを与えられる社会にしていきたい。

平田　豊岡は市中感染の可能性が低く、私も俳優ものびのびと作品づくりに集中でき

◆シンポジウムの模様は動画サイト「KOBE_TV」と「ひょうごチャンネル」でご覧いただけます。